

国立美術館の活動のご紹介

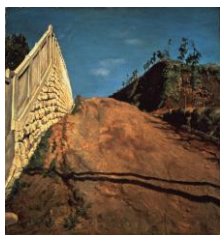
2019年10月

独立行政法人国立美術館

○ 展覧会・上映会事業

国立美術館では毎年、それぞれの館の特色を活かした、多くの企画展を開催しています。こうした企画展の中には、海外の美術館と連携した規模の大きなものから、我が国の文化・芸術に功績を残した芸術家たちの再発見・再評価の意味を込めたものなど、国立美術館ならではのものも多くあります。

所蔵作品の常設展示も大きな見どころの一つです。国立美術館では国内外の著名な作家の作品をはじめ、歴史的に重要な作品も多く所蔵しており、年に数回の展示替えを行うなど、皆さまに少しでも多くの作品と出会っていただけるような工夫をしています。また、国立映画アーカイブでは映画関連資料の展示を行うだけでなく、監督、製作国、ジャンルなど様々なテーマによる映画の企画上映を開催し、国内外に映画作品の持つ価値を発信し続けています。



上段左から 岸田劉生《道路と土手と堀(切通之写生)》1915年 重要文化財 東京国立近代美術館 / 安井曾太郎《婦人像》1930年 京都国立近代美術館 / クロード・モネ《睡蓮》1916年 国立西洋美術館 松方コレクション / ワシリー・カンディンスキー《絵の中の絵》1929年 国立国際美術館 / パテープロフェッショナル撮影機 1910年頃製 国立映画アーカイブ
下段左から 上村松園《母子》1934年 重要文化財 東京国立近代美術館 / 稲垣稔次郎《結城紬地型絵染着物 竹林》1958年 東京国立近代美術館 / 富本憲吉《色絵金彩羊歯模様大飾壺》1960年 京都国立近代美術館 / ビエール=オーギュスト・ルノワール《帽子の女》1891年 国立西洋美術館 松方コレクション / アルベルト・ジャコメッティ《ヤナイハラ》1960-61年 国立国際美術館 / 重要文化財『史劇 楠公訣別』1921年 35mm可燃性オリジナル・ネガフィルム 1,053フィート (ポジ像に反転) 国立映画アーカイブ

○ 調査・研究事業

国立美術館では、美術作品の真価を伝え、より魅力ある展覧会を企画していくため、日々地道な調査・研究事業を行っています。しかし、こうした活動は普段、ほとんど皆さまの目に触れることはありません。そのため、あまり美術館の活動として知られていないかもしれませんが、その成果は展覧会や講演会、ギャラリートークなど、様々な形で来館者の皆さまに還元されており、欠かすことのできない大変重要な活動の一つとなっています。

また、日々の研究の中で蓄積されていった豊富な学術資源を、外部の学芸員や研究者に公開し、我が国における美術館活動に貢献していくことも国立美術館の使命です。今後こうした関連機関との連携などを通して、美術振興の中心的拠点としての基盤の強化に努めていきます。

○ 所蔵作品・フィルムの修復

国立美術館では、国内外の優れた美術作品を4万点以上所蔵していますが、中には経年による劣化等で傷んでしまっているものもあります。そのため、適切な周期によって作品の修理・整備を行うことが欠かすことはできません。貴重な作品を良好な状態で後世に伝えていくことは、美術館の大切な役割の一つとなっています。

こうした美術作品の修復のほか、国立映画アーカイブでは映画フィルムの修復を行っています。フィルムの修復においては、劣化や損傷が見られるものや、滅失の可能性のある可燃性フィルムなどの複製作業を行うことによって、長期保存に努めています。また、芸術的、歴史的、資料的に価値の高いものについては、より高度な技術による復元を行っており、2010年には黒澤明監督の『羅生門』のデジタル復元が全米映画批評家協会賞を受賞するなど、その活動は国際的にも高く評価されています。



○ 教育普及事業

国立美術館では、美術と人との繋ぐ架け橋の役割を果たすことを目指し、ギャラリートークやワークショップ、講演会など、子どもから大人まで全ての世代が美術に親しみ楽しんでくださるような活動を行っています。

家族で参加できるプログラムや学校教育との連携にも力を入れているほか、近年では東京国立近代美術館でビジネスパーソン向けの対話鑑賞プログラムや、国内初となる訪日外国人向けの対話鑑賞プログラムなども開催しました。こうしたアートをビジネスや観光などの様々なシーンで活用しようとする動きは近年注目を集めており、文化・芸術の持つ可能性を広げていくことにもつながっています。

国立美術館では、今後もアートをより身近に、より楽しく鑑賞していただけるようなプログラムを企画し、社会に向けて広く文化・芸術の価値を発信することを目指していきます。



○ 建物・設備の整備

国立美術館では、貴重な美術作品を適切な保存環境の下で管理し、快適な空間の中で皆さまにゆっくりと作品を鑑賞していただくため、建物や設備の老朽化対策、改修工事等も行っています。

国立美術館の管理する建物の中には、歴史的に重要なものやデザイン性に優れたものも多くあります。そのひとつが上野の駅を降りてすぐ右手に見える、国立西洋美術館本館です。20世紀を代表する建築家の1人である、ル・コルビュジエ（1887 - 1965）によって設計されたこの建物は、2016年に世界文化遺産に登録され話題になりました。こうした貴重な建築物を後世に伝えていくためには美術作品と同様、修復と適切な維持管理が必要となります。



<設計>左から 東京国立近代美術館（東京・竹橋）本館：谷口吉郎 工芸館：田村鎮 / 京都国立近代美術館（京都・岡崎公園）：槇文彦 / 国立西洋美術館（東京・上野公園）本館：ル・コルビュジエ 新館：前川國男 / 国立国際美術館（大阪・中之島）：シーザー・ペリ / 国立新美術館（東京・六本木）：黒川紀章 / 国立映画アーカイブ（東京・京橋）：蘆原義信

○ 情報・資料の収集等

国立美術館では、展覧会や美術に関する資料や書籍の収集も行っており、一般の方々も利用できるライブラリなどで広く公開しています。また、所蔵作品のデジタルアーカイブ化や、国内の新聞や雑誌の記事、海外の美術資料に関するデータベース作成などにも取り組んでいます。

デジタルアーカイブとはあまり聞き慣れない言葉かもしれませんが、その一例として現在、国立美術館で導入している「所蔵作品総合目録検索システム」や「遊歩館」とよばれる仕組みを紹介します。これらは、国立美術館のホームページ上で所蔵作品の画像や情報を検索できるシステムです。国立美術館では現在、所蔵作品を高解像度のデジタル画像で残す取り組みや、そうした画像を広く皆さまに公開できるようなシステムの整備を行っています。これらは教育・防災目的やデータ共有による研究活動の活性化など、幅広い分野での活用を想定したのですが、皆さまにより気軽に、少しでも多くの所蔵作品に出会ってほしいという思いも込められています。

今後さらに社会が高度に情報化していくにつれて、こうした情報提供機能の強化はますます求められるようになるでしょう。しかし、美術館におけるデジタルアーカイブには未だ技術的な課題も多く残されています。国立美術館では、これからも皆さまに美術作品をより身近なものに感じていただけるよう、資料の公開を進めていくほか、情報技術の面でも改善を進めていきます。